

猫蓑通信

第130号
(特大号)

令和8年
(2026年)
6月30日発行
(年3回発行)

筑波大学附属駒場中学校での

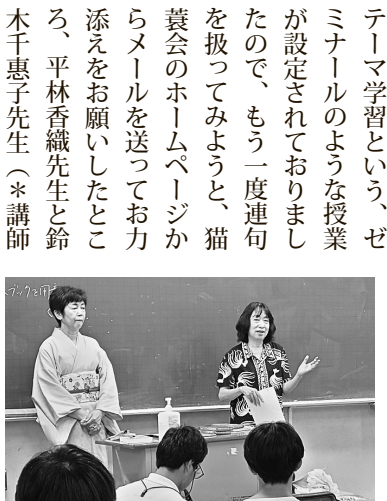
〈連句〉の授業実践

千野浩一

筑波大学附属駒場中・高等学校で国語を教えております、千野浩一と申します。二十数年前、私が大学院に在籍していた頃、日本近世文学会に所属していた関係で鈴木千恵子さんとの面識を得まして、猫蓑会の句会にお誘いいただいたことがありました。大学院で蕪村の俳諧を学んでおりましたが、当時は発句を扱うばかりで、連句というと一段上の難解なものという印象を持っておりました。実際、古典俳諧の連句の注釈書は少なく、俳文学会や研究会でも連句を中心に据えた発表はまれという状況でしたから、「専門は俳諧」という看板だけで、実際は何も分からない素人同然という、ちよつといたたまれない立場で猫蓑会の句会に参加させていただきました。

ご指導いただいたのは坂本孝子さんで、その座には青木秀樹さんもおられたかと記憶しております。がちがちに思考が膠着し、始終付け泥んでいる私を軽やかに励まし、下手な句を巧みに活かしつつ、体裁を整えてくださって、やつとのことで最後まで乗り切るという経験でしたが、下手は下手なりに連衆の一人としてそこに居てもよいのだという、ふんわりとした幸福感到に包まれたことを、今でもよく覚えています。句会の後は、深川のお店で皆さんと食事を一緒に過ごさせていただき、猫蓑会ではお互いを下の名前と呼ぶのですよ、などと教えられたことを今でも鮮明に覚えています。

その後、大学院修了前後の雑事に忙殺されて、猫蓑会の皆さまには不義理をしてしまいました。あの句会での嬉しい気持ちはずっと消えることなく、教員として過ごす中で幾度も思い出し、時に見よう見まねの句会を授業で実施することもありました。昨年度は中学三年を担当し、テーマ学習という、ゼミナールのような授業が設定されておりまして、もう一度連句を扱ってみようと、猫蓑会のホームページからメールを送ってお力添えをお願いしたところ、平林香織先生と鈴木千恵子先生(＊講師



平林先生(左)と鈴木先生(右)

●目次●

▼筑波大学附属駒場中学校での

〈連句〉の授業実践

千野 浩一 1

◎第百七十四回例会(初懐紙) 歌仙六巻

4

◎第百七十五回例会(藤まつり) 二十韻八巻

7

◎亀戸天神社奉納正式俳諧

9

▼執筆を終えて

高山 鄭和 10

▼悼 冬霞庵上月淳子丈

鈴木千恵子 11

◎第30回記念えひめ俳口全国連句大会入賞作品

12

▼【留書】えひめ俳口全国連句大会に参加して

13

―連句に学ぶ我が人生― 荒木 鑑

16

●事務局だより

として来ていただいたので敬称を先生としていただきます)からお返事をいただき、ご快諾いただいたという経緯です。

初回の九月には、平林先生と鈴木先生にご指導いただき、以降は平林先生に、十月、十一月、一月、二月と計五回、各回二、四時間もの長い時間ご指導いただきました。また一月の句会には田中秀夫さん、佐々木有子さん、近藤純子さん(二月にもお越しいただきました)、根津忠史さんにもご来校いただいて、捌きを担当いただきました。

以下に、九月から十一月にかけて生徒たちが四班に分かれて巻いた二十韻を載せます。



近藤先生(左)と平林先生(右)

二十韻「糸瓜」の巻

衆議判

ぶら下がる外に能なき糸瓜かな

東明雅

簾はずして覗く残陽

荒木陽

塾帰り弓張り月を川辺にて

栗原悠人

三番ホーム準急電車

陽

寒波来たり軋む線路の音凍る

後藤隼

白い恋人お土産にする

清水大雅

チョコレート口にし君は微笑んで

石川舜

抱き合う二人響く心音

隼

遊覧船波間に鯨潮を吹く

隼

ダウンタウンなしダウンカウント

陽

ナオ喧騒の渋谷の街を千鳥足

隼

踏みとどまらず線路の上へ

大雅

キリストに願う彼女の黄泉がえり

舜

浴衣の君に海の面影

悠人

昼の月薫風香る漂流記

悠人

面舵一杯海賊の真似

舜

ナウあれこれと一年懐ひめぐる年

隼

霞かかりし思い出に泣く

悠人

花影は風に流れて空を舞う

陽

春の名残の見せた幻

舜

二十韻「糸瓜」の巻

衆議判

ぶら下がる外に能なき糸瓜かな

東明雅

それもできずにただ柳散る

國松綾太

日が落ちて月を待つなら立待に

加藤工朔

応援団長染める桃髪

綾太

君と引く綱引き掛け声オーエスと

佐藤晃寿

素知らぬ顔で既読待ち侘び

小野時宗

大晦日一人で食らう肉とそば

綾太

あれもしかして嵐二宮!?

綾太

いけずともテレビに映る初詣

綾太

一人の部屋に降れる白雪

時宗

ナオ宇宙にて地球それほど青くなく

時宗

掻き鳴らす弦「天体観測」

時宗

授業中皆で分け合う菓子の山

晃寿

写すノートと無視する板書

工朔

酒に酔いうたた寝気づけば終点駅

晃寿

駅で見つけた一輪の花

時宗

ナウ目に映る月と蛍と笑う顔

綾太

エッフェル塔へともに旅立つ

綾太

花も見ず団子を囲む観光客

工朔

来年いつぱい友達ほしい

時宗

二十韻「糸瓜」の巻

衆議判

ぶら下がる外に能なき糸瓜かな

東明雅

家の庭から真夜中の月

久保田智也

早稲の飯香り立つ家食卓に

永倉理人

フライトドクター腹を鳴らして

柏田駿太郎

ウ富士山の通行料は四千円

長澤拓輝

高すぎる理想恋路はるかに

勝山大耀

冬景色幼馴染と手をつなぎ

大耀

あの日の心どこへいきしか

駿太郎

酒を呑み昨日の記憶飛んでいく

拓輝

政治家達は認知症也

駿太郎

ナオブルドッグ靴を舐めきり舌を出し

理人

出世目指してごまをする身は

拓輝

月涼し仕事終わりに仕込む味

大耀

夏祭りにて愛の告白

智也

百日紅冷めぬる恋は夢の中

大耀

いつもの道で君を探して

理人

ナウ水たまり顔になかった目口鼻

駿太郎

幼子飛ばすたんぼぼの綿

大耀

天にゆく吹雪いた花に誘われて

拓輝

青空に舞う僕の角帽

智也

二十韻「秋の声」の巻

衆議判

紙剪れば紙にも秋の声生まる

東明雅

風にたなびく早稲の鼈甲

東井悠

十三夜名残惜しいと眺むらむ

久富悠介

ヘッドフォンつけJ-POP聞く

悠介

ウ身一つで枯れ木にもぐる冬の蜂

悠

君もごろごろしてるだろうか

悠介

紙飛行機想いを乗せて明日へと

宮崎晟

二人手をとって遠回りする

保坂真宥

夕焼けの温もり残し色落つる

悠

かなかなかかなかかなかかなか

悠介

ナオ薄紅葉もう一度見る二週明け

悠介

絶望の中細い月見る

大野敦彦

夢を持ち湖畔にキャンパス立てる人

悠介

涼しい家に忍び込む鳥

悠

夏休み親のいない日見つけては

悠介

別れる時の名残惜しけり

敦彦

ナウクリスマス彼女が来ずに夜が更けた

真宥

戸を開ける花の香りに誘われて 悠
髪切る音は春の声かな 悠介

令和七年 九月 十三日 起首

十一月二十九日 満尾

於 筑波大学附属駒場中学校五十周年記念
会館

以上が、生徒たちが初めて巻いた作品ですが、少なくとも院生時代の私自身と比べるとはるかに上手で、複雑な気持ちになります。

ともあれ、上手下手だけではない、人と人との出会いや、作品を通じて人と心を通わせることができたのであれば、望外の喜びです。私自身、二十数年前に猫養会の皆さまとご縁を持ち、そのことが宝物のような記憶としてずっと心に残り、だからこそ筑駒の十五歳の子どもたちにもその絆を繋ぐことができたと考えると感慨深いです。

私が最初に連句の授業を実践したのは確か二〇一〇年で、当時高校二年生の生徒と連句を巻いたのでした。当時の生徒たちは当然ながらすでに社会人として第一線で活躍しています。消息を辿ることができる生徒の一人は裁判官になって地方に赴任している由、また医師になった者、吉本興業で活躍している者、文科省で働いている者と様々です。多くは文学とは縁のない方面で活躍していますが、彼らの中にも、私を感じたのと同じような、ふんわりと温かく

幸せな記憶が残っていて、それが何年後か何十年後に別の誰かに繋がっていつてくれればと願っています。

最後に、生徒を代表して、東井悠君（当時中学三年生）が御礼の文章をしたためましたので、お目通しいただければ幸いです。

はじめに、わざわざ学校まで足を運んでくださり、私共と一緒に連句を巻いてくださった猫養会の皆様、ありがとうございます。

連句がお堅いものではないということは分かっていたものの、やはり自分で連句を巻くとなると、少し尻込みしてしまうものもありました。上手くできるのか不安な部分もあったものの、猫養会の方たちとお話するうちに、ゆつくりと、しかしすんなりとその雰囲気、溶け込んでいるのを感じました。

いざ巻こうと、実際に巻かれた連句の例をみて、古語、現代語、外来語の区別問わず、好きに自分の想いを表現できるということには少し驚き、昔の人たちも、こんな感じで気楽に楽しんでいたのだらうなと連句に親しみが湧きました。

皆で巻くからこそ、滑らかな運びや意外な展開があり、その場で感動を共有し合いながら物語を繋いでいく様は、さながらゲームのよう。

思いついた語の季語が少しズレていたり、人情や月などがあつたりと、式目にならう難しさ（かつ面白さ）もありました。詠むのに

時間がかかることも多く、すらすらと巻くのはまた違うところもありましたが、悩んで考えつく一句もまた一味あり、心地よいものでした。

一人で俳句を詠むだけでは得られない、皆で詠み継ぐ楽しさをたつぷり味わうことができました。またみんなでお茶菓子を囲みながら、和やかに連句を巻けたらよいなと思います。

貴重な経験をありがとうございました。



『十七季』と格闘する生徒たち
加藤君(左)、長澤君(中央)、東井君(右)

第百七十四回猫蓑会例会
初懷紙 歌仙六卷 154

芹の座

歌仙「関八州の」

奥野美友紀 捌

初旅や関八州の空青し

美友紀

御慶を交はす晴れやかな顔

忠史

キャセロールスパイス少しふりかけて

未愁

ジャスミンティーに入れるはちみつ

香里

延べ段の切石乾く今日の月

あき子

曲り角には色変へぬ松

史

ウ 幻の小さき蜻蛉を追ひ続け

里

AirPodsにはリバイバルジャズ

あ

年下の彼もこれまた魅力的

里

幼なじみの化粧濃くなり

あ

それとなく国宝級を自慢して

史

ラインぎりぎり決まるスマッシュ

紀

月涼し宇宙を仰ぐ舟ひとつ

悠

羅の下揺れる十字架

あ

イマジンとイエスタデイで友の葬

悠

街道筋に時の鐘鳴り

史

無人駅猫が迎へる花大樹

同

親子三代帽のうららか

あ

ナオ 野遊びに荷物の番のうとうと

里

防犯カメラ彼方此方に

史

キーボード指のこはばり悩まされ

あ

廊下ぴかぴか磨く雲水

史

絵本屋の灯りの点る雪の窓

あ

里山に来る白鳥の群れ

気合ひ入れ並んで買った新モデル

推しのためならバイト頑張る

結ばれたい酒の力を借りてでも

お宮貫一浜の公園

塾帰り国道沿ひに三日の月

ひよんなどころで猪に遭ひ

ナウ 銀杏落ち幹のまはりに円描く

溢るる笑顔いつも絶やさず

しっかりと母校の櫂引き継いで

小学生が地区を探検

花篝はんのり浮かぶ仁和寺に

蝶々蝶々遊びにも来よ

連衆 根津忠史 棚町未悠 式田香里

岩崎あき子

齊の座

歌仙「力こぶ」

永田 吉文 捌

初場所やおつつけて勝つ力こぶ

吉文

電子マネーでもらふ年玉

洋子

川沿ひの櫂の樹皮のあざやかに

有子

首に紐つけ散歩する猫

遊子

月満ちていつしか気持ち丸くなる

拓也

たうもろこしに醤油たつぷり

遊

ウ 竈馬京の町家に翹休め

洋

匠の置いた形良き石

有

三年の年季明けには君二十歳

洋

男好きするほろ酔ひの顔

拓

恋多き美肌の血筋受けつぎて

幟はためく喫茶店前

月の下帰省の友と同期会

四苦八苦する物価上昇

中国にパンダ残らず引きとられ

駄菓子好きの子学位取つたと

何が出るびつくり箱の花筵

黄金週間どこへ行かうか

ナオ 春の宵故郷の母懐かしむ

払つても蛇まとひとつく道

穀雨なりビニール傘をくるくると

賽銭箱に投げられる銭

巡り来る大衆演劇待ちわびて

AIの選る最善の策

無人駅無人販売無人レジ

夢かうつつか妖怪とキス

改めてみんなで学ぶ萩野式

湯婆入れてあたためてやる

靴ひもをきりと寒の月あかり

議會解散呷る爛酒

ナウ 達筆でサイン一氣に書くといふ

ポストはけふもはらべこのまま

推し活で老いの生き甲斐みなぎりて

午後のひととき呉服買ふ客

花の園小学唱歌合唱す

どちらを見ても山笑ふ里

連衆 大島洋子 佐々木有子 本多遊子

藤澤拓也

御形の座

歌仙「羽ばたきは」

林 転石 捌

羽ばたきはひとつところを目ざす鷹

転石

雪原をゆく白き足跡

水空

ちくちくと刺子半纏縫ひあげて

ひろ子

BGMに流すFM

千恵子

読書やめ眼を瞬かせ今日の月

正夫

里の母より届く干柿

夫

魯田に案山子の影が長く伸び

空

初のデートは帰りたくない

千

エコー検査で君の胸中探れたら

子

阿修羅の眉は愁ひほのかに

同

絶え絶えに水琴窟の涼しき音

同

吉兆と知る蝙蝠の月

千

変らずに人の溢れる中華街

夫

牛刀振るふ腕の確かさ

石

掛声にあやうさのあり新総理

千

大阪締めでさあさこれから

空

花見船芸妓引きつれ旦那衆

同

磯遊びする子らが遠くに

千

ナオ 父母会の三時のおやつ桜餅

夫

俺もほしいと首を出す犬

千

自己中な奴の自慢に座がしらけ

空

グラデーションに染まる試験紙

同

尋ねたいイエスとノーのタイミン

子

妻の座につく押しの一手で

千

ふと夫に凭れてみたい夕まぐれ

子

抽斗の底そつと置く文

夫

古書店に与謝野晶子の色紙あり

メニユーいっぱい老舗食堂

秋鶉飼余韻あぢはふ月の宿

同

仕事終へまづ今年酒酌む

子

ナウ 村芝居近づいてくる触れ太鼓

夫

ポスターの字の色にダメだし

千

傍らに血圧計と広辞苑

千

不可能のない俺の人生

夫

トロツコに盛りの花の降りかかり

石

風やはらかく吹き抜ける谷

空

連衆 米田水空 白崎ひろ子 鈴木千恵子

國司正夫

繁蔓の座

歌仙「初山河」

平林 香織 捌

人の世を天馬愛づるや初山河

香織

旅行始と新調の靴

明子

そこはかとフルートの音の聞こえてきて

鑑

積み上げた本つひぞくづれず

濤声

公園の木に引つかかる月ひとつ

坊太

鳥の渡りを狙ふ写真家

声

ウ 外つ国の子らも混りて盆踊り

明

長崎の坂港はるかに

声

彼を待つ駅のベンチに鐘響く

鑑

手をつなぎつつ入る教会

太

最年少女性大臣送る夫

明

浄瑠璃遣ひ国宝となる

声

生き物のやうに噴水はつみあて

明

月を友とし蛩舞ひ飛び

路地裏の猫誰にでもでれどと

眼鏡ずり落ちうたたねの爺

鑑

夢に見る故郷の丘は花万朵

声

校歌合唱うらかな庭

鑑

ナオ 炬燵ぎに名代の茶器を自慢する

明

ヒエログリフの墓に魅せられ

鑑

酒飲みて海も暮れる島の夕

声

角を曲がつて鳥居一礼

太

缶蹴りの缶を分別塵とされ

明

再会果たす忘れ得ぬ恋

鑑

少将は卒塔婆小町を想ふらん

声

野はおしなべて片時雨なり

同

気になるといつも注意の警視正

太

積み木の角の面取りをする

同

月まろし青春といふバイク乗り

明

秋刀魚にぴちとレモン汁はね

声

ナウ 田のかかし仕事を終へて安堵顔

鑑

剣道場で素振り千回

明

図書館のドアは開いたり閉まつたり

鑑

思ひもかけず見つかつた鍵

太

花廻廊深呼吸してゆつくりと

織

春日傘来る鄙の縁側

声

連衆 野口明子 荒木 鑑 小原濤声

山本坊太

5.6

後妻の座虎視眈眈と狙ふ奴

西田荷夕

蘿蔔の座

歌仙「墨田の風」

坂本 孝子 捌

嘘ばかりつく口紅の濃き

小川裕司

夫 孝 心 夫 孝 夫 司 霞 司 心 夫 霞 心 司 心 霞 孝 司 同 夫 霞 夫 霞 心 霞 心

第一百七十五回猫蓑会例会
藤まつり例会 二十韻 1〜3

根津の座

二十韻「藤まつり」

根津 忠史 捌

やはらかな雨も一興藤まつり

忠史

太鼓に揺れる春の池の面

霞

鮎の子を少し甘めに炊き上げて

雅世

兄弟揃ひご飯お代り

直美

短夜に急ぎ入る月武家屋敷

太郎

予報確かめ更衣する

史

AIの画像に抱く恋ごころ

霞

素つ頓狂な君の唇

世

仮面付け自信みなぎる舞踏会

直

大きな窓に借景の庭

太

ナオ 昨今は熊の冬眠遅れ気味

史

神保町で日記買ふらし

霞

満ちてくる思想の海に身を投げて

太

降嫁の姫は涙見せない

直

月円か夫婦地蔵は肩を寄せ

世

合コンメンバーどれも団栗

史

ナウ 村芝居配役決めは投票で

霞

大吟醸酌む友のしわの手

世

無人駅の静寂の中花の旅

直

目借る蛙に深呼吸する

太

連衆 高塚 霞 篠塚雅世 高橋直美

佐藤太郎

芝の座

二十韻「ふれんばかり」

三木 俊子 捌

太鼓橋ふれんばかりの藤の房

俊子

春の驟雨に匂ひ立つ街

香織

蓬餅吾子と丸めて食卓に

さつき

胡坐の猫の大欠伸して

英雄

ウ 山小屋に明日の楽しみ仰ぐ月

あき子

炎暑の蹊修行僧行く

裕司

耳なれたラジオの声は母に似て

あ

消した思ひ出浮き沈みする

香

亀戸は庶民の酒場軒つらね

裕

魔物棲むらし総理公邸

英

ナオ 馴初めは豪雪地へのDMAT

織

二人で使ふひとつ湯たんぽ

さ

愛唱歌夢の中でもかぐや姫

あ

カリヨンの音のあるかなきかに

織

望月に願ひを込めて祈る影

さ

翁茶を点て冬を待つ庵

英

ナウ 深海の色して秋刀魚焼きあがり

あ

リードぐいぐい犬と駆けゆく

裕

語らひの学府の花の誇りに

織

踏まれるほどに伸びる若芝

さ

連衆 平林香織 仲井さつき 鈴木英雄

岩崎あき子 小川裕司

神田の座

二十韻「神の苑」

國司 正夫 捌

ゆるゆると揺るる藤房神の苑

正夫

漫ろに歩く亀の鳴く池

雅子

炬塞の茶会に友ら集ひあて

明子

たたみのへりをふまぬ習はし

壽子

ウ 寒稽古素振り百本照らす月

拓也

かじかんだ手をさする優しさ

をんみ

身長と経済力に絆される

雅

高き山ほど征服に燃ゆる

明

三千巻仏典の書写ひたすらに

雅

遊ぶ園児のかんだかき声

壽

ナオ 縁側に忘れ去られた祭笛

み

黒鯛釣りの仕掛け工夫し

明

古着屋で買った着物で彼に会ふ

拓

夜更けに新酒酌み交はす仲

み

タワマンの最上階に浮かぶ月

雅

拝み太郎の腰の低さよ

明

ナウ 商人は実直なのが一番さ

み

弁当売りがひとり立つ駅

拓

遠ざかる列車追ひかけ花吹雪

壽

青空高く飛ばす風船

拓

連衆 武井雅子 野口明子 杉山壽子

藤澤拓也 福澤をんみ

令和八年四月二十三日(木)
於 亀戸天神社

458

鑑別

連衆 坂本孝子 宇田川肇 角田くるみ

角田くるみ

鈴木千恵子 捌

連衆 菅井明子 永田吉文 石川 葵

石川 葵

佐々木有子 捌

連衆 八卷 翔林 転石 渡辺恵未

林 転石 渡辺恵未

品川の座

二十韻「色の濃し」

江津ひろみ 捌

藤一面この房殊に色の濃し ひろみ
聞いた気のある亀の鳴く声 了斎
春炬燵読みかけのまま本置いて ひろ子
めがね屋さんの締め直す螺旋 遊子
入り組んだ海岸線に月涼し 純子
ウ 我も三毛子も顎を手に乗せ 陽一郎
恋愛は解き明かされぬミステリー み
隅に「希望」の残る空箱 斎
鉄鍋に心を込めてたまご巻く 遊
笹舟浮かべ遊ぶ里の児 子
ナオ 小春日のあつといふ間に暮れかかり 斎
嬉しいときにくしやみ出続け 純
迷路経て着く漱石の山房へ 陽
双子入れ替へデート上々 純
月は見えてある秘め事のあれやこれ 陽
南瓜のお化け目と口を開け 遊
ナウ ご先祖の魂と会ふ草の市 斎
喜寿の酒酌む小さき幸せ 子
爛漫の夢の跡なる花筏 同
肩にひとひら融ける淡雪 陽

連衆 鈴木了斎 白崎ひろ子 本多遊子
近藤純子 秋山陽一郎

王子の座

二十韻「池面に揺るる」

西田 荷夕 捌

小糠雨池面に揺るる藤の花 荷夕
蜂の羽音に遠回りする 鄭和
春炬燵ミステリーなど傍らに 秀夫
お名前シール全部貼り付け 坊太
風死して屋根にぼつかり月の舟 未悠
ウ 多分いつもと違ふ香水 夫
余所見するあいつの耳を引つ張れば 和
またダイエット減らす糖質 悠
ひとり旅名代の酒蔵捜し当て 悠
海鼠壁からふらり鬼太郎 太
ナオ 温突の薪の煙に咽る母 同
大根の皮しなしなになる 和
なつかしき路面電車に出会ふ街 悠
真意に気付く古いお手紙 悠
発表会終へてマドンナ囲む月 悠
鶏頭数ふ歌詠みの妹 悠
ナウ 体育の日鉢巻締める学生ら 悠
吉田山にはうまいまんぢゅう 悠
久方のよもやまばなし花筵 夫
膝の仔猫とチェロのCD 和
悠

連衆 高山鄭和 田中秀夫 山本坊太
棚町未悠

亀戸天神社令和八年藤まつり奉納正式俳諧
俳諧之連歌二十韻

藤波に隠るる風の行方かな 了斎
春のスカーフ淡き紫 雅子
若駒の和毛の背なを撫でやりて 香織
にほひをぎゆつと絵手紙に詰め あき子
雲は後ろへ流れ車窓の月円か 孝子
ウ テキーラグラスとオリブの実と 秀夫
間諜に知られぬやうに掘る薬 良子
艶落としてなくす三億 有子
金曜の放課後に死ぬたまごつち 桜千子
蛍光灯のしばし点滅 をんみ
ナオ 登り窯厳寒の薪投げ入れる 徹心
腰を伸ばせば空に丹頂 英雄
求愛のダンススローなバラードに 洋子
遺伝子レベル相性がよい 肇
祇園会の月の逢瀬へ急ぎ足 転石
ひと夜の事は夢の空蟬 遊眠
ナウ 半音を上げせせらぎの流れ来る 純子
名主屋敷に鶯連なり 雅世
郷土史を書き継ぎ花を友として 千恵子
茶摘の籠は茶葉で一杯 執筆

配役
宗匠 鈴木千恵子 花司 野口 明子
脇宗匠 武井 雅子 配 硯 篠塚 雅世
執筆 高山 鄭和 太鼓 根津 忠史
知司 近藤 純子 奏楽 佐々木 有子
座見 田中 秀夫 解説 平林 香織
座配 内田 遊眠

執筆を終えて 高山鄭和

この度猫養会の令和七年芭蕉忌・明雅忌及び令和八年藤まつりの正式俳諧興行にて執筆の役を拝命した事、私の連句人生においてまたとない経験であり、大きな収穫であったと考えている。思い起こせば十年ほど前に知司のお役のご指名を頂き、台本を読み上げながらの経験はあったものの、今回の本格的な執筆役は私にとって本当に大切な機会であった。

それなりの練習は積んだつもりではあったが、当日本番直前でのお役ではまだまだ執筆の所作などに抜けや間違いも多く、ご連衆の皆様的確なアドバイスとサポートにより、最終的に何とか本番を乗り切ることが出来たこと、感謝、感謝の他無い。藤まつりの舞台を終え、肩の荷を降ろしてホッとしている。

今回の執筆のお役をやらせていただくにあたり、私にとっての一番の課題は吟声をどのようにやったらよいのか？であった。世の中に大きい声を出す機会というのはそれなりにあるもので、よく知られているものとしては応援団の声援、イタリアのカンツォーネ、詩吟、勿論いろいろな合唱や民謡コンクールなどなど。私自身もその昔、東京駅で地方転勤の先輩を送り出す新幹線のホームで、「フレー！フレー！」とやった経験があった。でも、ただ大声を張り上げるだけでは吟声とは言わないだろうとも考えた。台本によれば、「発句・脇句発声二声、花の句二声」とはあるものの、声の出し方や声の大きさに関しては、細かなインストラクションは見当たらない。吟声なるものが何時の時代に

まとまった姿となったのか定かでないが、録音録画技術が世に出て以降の歴史もそう長くはなく、それらを記録したものも多く見当たらないのが現実。

私が連句の吟声の参考になりそうだとまず思い当たったのは、短歌の詩吟と歌会始の披露のふたつ。ただ両者とも、実際にYouTubeなどを覗いてみると、多くが音曲・抑揚が加味されており、果して現代の連句の吟声に相応しいだろうかと疑問に思われた。詩吟の世界には俳句の詩吟もきちんとしたジャンルとしてはあるものの、余韻を十分に楽しめる魅力的な吟声には見えなかった。それと詩吟・音曲と捉える時、いかにも五・七・五や七・七は一塊の音声を伴う詩としては短かすぎるのではと感じた。短歌の詩吟でも多くが二回繰り返し吟詠されているものが多く、長句と短句がそれぞれ独立した詩という連句の建前上、どのように連句を吟じて行くべきかが正直自分の中で固まらなかった。

そこで最終的に、いたずらな抑揚や節廻しは避け普通に読むことと決め、細部に幾分か工夫をしてみようという基本線を決めた。ところがいざ練習を進めるとこのくらいはできるはずという自分の思いに反して、昔はある程度出ていた大きな声が八十歳に手が届く年齢に至って自分の思うレベルの音量に全然達していないこと、更に練習を少し頑張ると直ぐに声が噎れてきてしまうという現実に愕然としてしまった。正直この思いもよらなかった自身の老齢化の限界に自分ながらびびり。吟声の途中で声が噎れたりしたのは、せつかくの晴れの舞台を台無しにするようなこととなり申し訳ないことの上なく、対応を迫られる羽目に。普段風呂に

入ったの鼻歌程度の声は出してはいたものの、短期間にそれを強化する術もなく、止む無く声を噎らさない程度に頑張るという現実路線を走ることとした。

練習を通して吟詠テクニクとして固めていったのは、①基本的に詩吟のような大きな抑揚は付けない、②早口にならない、ある程度の間を大切に、③発句・脇句・花の句は、一声と二声に変化をつける、といったことだった。実際の本番での吟声は如何だっただろうか？やっている本人には意外と現実感が無く（あがつていたのか？）吟声を楽しむというレベルには、全く達していなかったと請け合う次第。

正式俳諧興行は、ある程度の広さのある会場で不特定多数の観客が想定される中、少なくとも座に居並ぶ連衆にはきちんと連句の流れが把握でき、且つ連衆以外の観客にも一体何をやっているかが大雑把でも良いから理解できるようにということが要求される。これには執筆を始めそれぞれのお役が滞りなく所作や吟声を演ずることの他に、解説やアナウンスがきちんとしていること、舞台装置が整えられていることなど、多くの要素が総合されて一つの完成形に至るものと見る。勿論、連句の言葉そのものが耳に入りやすく、分かり易いことも肝要な基本である。このような総合力を歴史的積み重ねの上に立って、遺憾なく発揮できることは連句集団猫養会の大きな魅力であると考えてる。



巻き終わり吟声する筆者

悼 冬霞庵上月淳子丈 鈴木千恵子

令和八年二月二十七日没 享年九十八歳

淳子さんと初めてお会いしたのは、平成の初めの頃、関口芭蕉庵の連句教室でのことでした。背格好が私の母に似ていて、母に上品さと教養を足したら、このようになるのではないかと思います。思い出を語るときに欠かせないのは、夏に行われていたイベントでしょう。平成十九年から三十年まで続いたでしょうか、毎年八月の末には鎌倉で一泊二日の連句合宿がありました。神楽坂連句会主催なので、倉本路子さんが中心だった時代から佐々木有子さんにもお世話になっていました。その会場は、淳子さんが会員ということで鎌倉別邸ソサエティと決まりました。合宿は一日目の午後一時から、二日目の午後一時まで。一日目の日中に、西瓜などをいただきながら一巻。夕食と入浴を済ませてから、有志で一巻。二日目にもう一巻という日程でした。夜の一卷はお酒も入って盛り上がり、すでに二日目に入ることもしばしばでした。淳子さんはいつも最後まで付き合ってくださいました。後にはそのための部屋を用意しましたが、イベントが始まった当初は、淳子さんのお部屋を夜の座の会場にしていたので「この部屋がわたしの寝床なんです」という落語を地で行くよ

うな状況でした。ご迷惑をおかけしました。

お捌きは常に明快で、「それは前句に付いていません」などときっぱりとおっしゃるのが、気持ちよく思われました。名言がたくさんあったように記憶しています。「歌仙は裏の折端が一番好き。ここからは残りの句数が減っていくばかりだから」など。お食事は小柄なわりに健啖家で、お肉好きの野菜嫌い。野菜好きのわたしは連句合宿でよくモーニングのサラダを、淳子さんの分もいただきました。曰く「うさぎじゃないんだから、そんなに草ばかり食べられないわ」と。

淳子さんは、周りの方に迷惑をかけたくないと早くにご自分で、老人ホーム（SONDOケアラヴィーレ溝の口）に移られました。そこでの暮しは少し退屈でいらしたようで「七並べ老人ホームの昼下り、というようなものです」というお葉書を頂戴しました。令和二年の冬のことです。それを発句にいただいて、文音が始まりました。

七並べ老人ホームの昼下り 淳子

気配うかがふ足元の猫 千恵子

大鍋に粕汁ふつつ滾らせて 淳子
雑の発句で巻いたのは、わたしも初めてでした。脇も雑で受けて、第三を当季としました。その後、平林香織さんも加わって、三吟の文音もしました。坂本孝子さんと武井敦子さんとも巻いていらっしゃいました。

令和五年の秋から、ラヴィーレ溝の口のご好意で、二か月に一度、集会所で連句会を開くこ

とができるようになりました。のべ十人ほどが伺った三年余りの記録は、香織さんが「溝の口連句会作品集」としてまとめてくれました。淳子さんは、最後の数か月くらいは時々「もう句は作れないわ」とおっしゃいながらも、わたしたちの話題に加わってくれました。二月の初めに集会所を使わせていただいたのが最後となりました。

ご葬儀は、ご親族に囲まれた温かなものでした。

お嬢さまの木次温子さんは喪主のご挨拶で、学生時代に着ていた服は、ほとんど淳子さんの手作りだったとおっしゃっていて、ご自身もよく素敵な手編みのものなどをお召しだったことが偲ばれました。また「母は晩年まで連句を楽しんでいました」とお話しされました。温子さんが連句を体験したことはなかったのですが、「連句というのは集団で作るあげたる世界でも稀な文芸で、人と人との結びつきの上に成り立っています」と的確な紹介をしてくださいました。

淳子さん、本当に長い間連句をご一緒できて嬉しかったです。そして、最後まで連句を広めてくださってありがとうございます。



平成二十四年十月十六日芭蕉忌。左から脇宗匠・上月淳子、宗匠・坂本孝子、執筆・吉田醉山、東郁子奥様、老長・青木秀樹の各氏

【留書】

えひめ俵口全国連句大会に参加して

― 連句に学ぶ我が人生 ―

荒木 鑑

令和八年四月十九日に第三十回えひめ俵口全国連句大会に参加しました。

嬉しいことに、テレビ愛媛賞と俵口賞の入賞と、入選の一作品を加えて、三作品が入賞・入選しました。これはひとえに、それぞれの作品



授賞式の様子



左から筆者、内田遊眠さん、近藤純子さん

のご連衆のお蔭であることは言うまでもありません。この紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

私は所属しているテニスクラブで、猫蓑会の先輩とクラブの会議室で二〇〇六年から連句を始め、二〇一五年に猫蓑会に入会、例会に参加するようになりました。いまになつて連句をやつて人生いろいろ学んだと感じています。私は五〇年を超える会社勤務の間に、自分が組織人間になり切つてしまい、形式主義に染まり、人間としての柔軟性、多重性に欠ける人間になつたと感じていました。ところが、連句を始め、当会の皆さま、各地の連句会や文音で接触する方々から人間としての様々な気付き、奥深さを学ばせて頂きました。

当初の気付きは、連句とはテニスでいえばシングルスでなくダブルスの精神だというものでした。シングルスは、俳句や和歌に相当し、専ら個人のみ力量であるのに対し、連句は、パートナーと和してプレーしなければならぬダブルスの精神か、と痛感するようになりました。連句会に出席を重ね、詠んだ句について色々な議論を重ねるうちに、自分の気付きや思考がいかに単純で底が浅いかということを学んでいます。

昨年、自分の感性の単純さ、美に対する向き合い方の狭さを痛感した印象深いやり取りがありました。

自分が捌の連句会で連衆から、「初恋の口付けに似た青りんご」の句が出されました。実は

「青りんご」は夏の季語で、ここでは秋の季語を使わなければならない句なので、「青りんご」ではなく「りんご味」としては如何と提案しました。口付けと味は切り離せないものとの私の愚かな提案だったのです。

これに対して作者は、「初恋の口付けは単なる味だけでは済まされない」と猛反発。そこで、では青りんごではなく「りんご色」にしましょうかと提案しました。それに対して、作者は、単にりんごの今の状態をいうのではなく、初恋の「青りんご」の状態が、赤く色づいていく恋の深化の様子を詠みたいのです、とのことでした。初恋の口付けというものの意味合いを深くとらえて、時間の経過も含み込んだイメージを詠みたいということだったのです。そこで、「初恋の口付けりんご色づけり」と秋の句に修正したうえで、口付けという行為だけに注目した私の浅薄な認識を作者に詫言しました。

連句は初対面の方々でも、句を通してその方の人生の体験や感性に触れることを可能にします。「あー、そのような考え方や感じ方もあるのだなあ」とこの歳になつてしみじみと思ひ、連句を通じ我が人生の喜びや拙がりを感じるときこの頃です。



漱石と子規に表敬(於 子規記念博物館)

第三十回（令和八年）
えひめ俵口全国連句大会
受賞歌仙六巻 336

愛媛県連句連盟会長賞

歌仙「刷毛目を描く」

平林香織 捌

蒼天や刷毛目を描く秋の雲

香織

月待つ船の客の賑はひ

雅子

木犀の一枝挿しぬ竹筒に

孝子

沓脱石に下駄の大小

霞

野良猫のいつしか庭に住みついて

雅

楽しみにするスキー合宿

織

これはまあ雪女郎かと厚化粧

霞

惚れた風情で騙されようか

孝

遠ざかる後ろ姿に未練あり

霞

勝つて幕内大銀杏結ぶ

孝

腸活は善玉菌を増やすこと

雅

夏燕舞ふ宙の夕月

孝

京洛に祇園囃子の聞こえ来る

雅

二階座敷に運ぶ徳利

孝

ペイペイであつといふ間に清算し

雅

ハローワークの自動翻訳

織

爛漫と岬の花の咲く便り

雅

轡初めて若駒にかけ

孝

ナオ 出開帳お血脈にも長き列

織

乗客みんなスマホいぢつて

雅

円相場戦火のニュース響くなり

孝

いつも飢ゑてた七歳の夏

霞

どこへでもすててこのままうろうと

雅

街かどピアノノショパン巧みに

織

耳元に触るる吐息の心地良き

霞

地獄へ墜ちる愛の瞬間

孝

殺生石たちこめてゐる硫黄臭

織

山懐の移住夢見て

雅

コロラドのひとり暮らしの月高し

霞

嘯み煙草の父偲ぶうそ寒

孝

ナウ 達筆の招待状来る紅葉狩

雅

頭を振つて足拍子踏む

織

コンコースキャリケースを引いてゆく

霞

数々の嘘それも人生

孝

千年の命をつなぐ花大樹

織

高層階の鉢に蜜蜂

雅

連衆 武井雅子 坂本孝子 高塚 霞

霞

令和七年十月四日 首尾

霞

於 江東区芭蕉記念館

霞

俵口実行委員会会長賞

霞

歌仙「粹筋の町」

捌

粹筋の街の格子や月の客

肇

腕組み合ひて地虫鳴く道

忠史

色葉散る手水の余白埋めるかに

霞

石碑の文字は苔におほはれ

あき子

極上の銘菓を選びおもてなし

遊眠

櫓火の小屋にたたいまの声

肇

スタジャンの背に大きな会社の名

史

建制順に揃ひ敬礼

霞

戴灯式終えて友等の目に涙

あ

人体模型どこに消えたか

眠

北海にアザラシを追ふギリヤーク

肇

染めた卵は再生の月

史

輪になつて園児の笑顔風光る

霞

腰に手を当てミルクコーヒー

あ

積ん読も十年続き引きこもり

眠

魚板を連打朝のおつとめ

あ

光琳の屏風絵すがし花言葉

同

妖しの指にぬめる寒紅

肇

ナオ 玉の輿狙ふ悪女の薄情

史

期限の切れたパスポート持ち

霞

風なくもボールに揺れる日章旗

あ

鶴の化身が狂ひ舞ふ宵

眠

旅人を獣に変へる瀧の宿

史

小流やがて伏流と聞く

霞

墳丘に治部少輔陣の跡

史

社の裏にさざれ石あり

眠

あの技は父祖伝来の飛び鉤

史

への字に結ぶ固き口元

眠

月今宵女ごころに注ぐ酒

同

秋の拾のしつけ引き抜く

肇

ナウ お目当ては名物茶屋のところが飯

あ

先用後利富山売薬

史

砂山の陰に朽ちたる重機械

霞

フルートを吹く少年の顔

あ

石割の花爛漫と匂ひくる

霞

ふたへにかかる峰の初虹

眠

連衆 根津忠史 高塚 霞 岩崎あき子

肇

内田遊眠

肇

令和七年九月二十日 首尾

肇

於 新宿区赤城生涯学習館

肇

事務局だより

●既往の行事

- ・一月二十五日（日）、江東区芭蕉記念館にて第百七十四回例会（初懷紙）を開催。当日作品は4～6ページに掲載。
- ・四月二十三日（木）、亀戸天神社にて、第百七十五回例会（藤まつり）を開催。神楽殿にて正式俳諧（一般公開）張行後、二十韻興行。当日作品は7～9ページに掲載。
- ・六月二十八日（日）、同人会総会を銀座プロッサムにて開催。歌仙興行。当日作品は次号に掲載予定。

●今後の行事予定

- ・七月二十六日（日）、江東区芭蕉記念館にて第百七十六回（猫蓑会総会）を開催予定。歌仙興行。

●猫蓑会リモート連句会

- ・第三十三回を六月六日（土）に開催。作品を猫蓑会HPに掲載。
- ・第三十四回、第三十五回を、それぞれ、八月十一日（火）山の日、十月十二日（月）スポーツの日に開催予定。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます。

- ・岡本遊風様 令和八年二月 三千円
- ・高山鄭和様 令和八年五月 一万円
- ・匿名 令和八年六月 三千円

*基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●新入会員

- ・須賀友里恵（東京都） 令和八年二月入会
- ・仲井さつき（千葉県） 令和八年四月入会
- ・大森郁子（東京都） 令和八年六月入会

●記念切手のご寄贈をありがとうございます

・会員の方から、匿名でたくさんの方の記念切手をご寄贈いただきました。例会ご案内送付の料金別納郵便代金として使用させていただきます。郵送費が高騰しているので大変ありがとうございました。

●会員の刊書

・永田古文様が、詩歌句作品集を上梓されました。

『しらべの美学 永田古文詩歌句作品集』

百年書房 令和八年二月十五日刊行

定価三五〇〇円＋税

【目次より】 1短歌歌の劇場・2連歌しらべの国土・3俳句冒険の路・4連句果てなき航路・5川柳ウィットの軸足・6エッセー／評論古典の雅・7詩編今日の挨拶・8歌論しらべの論



●新宗匠立机準備中です

・初懷紙の折に鈴木千恵子会長より報告がありましたように、鈴木了斎・林転石両氏の宗匠立机が決定しております。鈴木千恵子・佐々木有子両理事による準備委員会が設置され、世吉付廻しや立机文集『双樹』の編集を進めております。

・文台披露を令和九年の初懷紙にて行う予定です。会員諸氏におかれましては、いろいろとご協力いただいておりますことを、心より御礼申し上げます。引き続きよろしくお力添え賜りますようお願い申し上げます。

●会員の訃報

・冬霞庵上月淳子様が二月二十七日に逝去されました。享年九十八歳。謹んでご冥福をお祈りします。

定期刊行 『猫蓑通信』第百三十号（特大号）

令和八年六月三十日発行

発行人 猫蓑会 鈴木千恵子

事務局 佐々木有子

〒161・0033

東京都新宿区下落合4・9・34・313

編集人 平林香織

編集委員

奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・武井雅子・田中秀夫（五十音順）

印刷所 関東図書株式会社